

故 事 新 編 論 (二)

かわかみ・ひさとし

第二次国内革命戦争時代に属する1934年に書かれた非攻は、その題名のしめすとおりの墨子の非攻をテーマとし、反戦、反儒教の意図のもとに、当時の社会情勢を反映している。それは、この一篇のもつスケッチ的体裁により完全にその時代を反映しているとはいえないが、むしろ雑文の一つとして、いゝかえれば彼の思想の一部である眼鼻口として、他の著作との連関のうちに全体を構成する。

こゝにえがかれているのは、楚が宋を侵略しようとするのを阻止すべく奔走した墨子が、公輸般を説得しさらに楚王をも説得して、ついに、宋楚両国の人民を戦争の惨禍から救つたという故事である。ところで、故事新編のうち前記三篇が形式的には歴史的故事を題材にした小説ではあつても、内容的には多分に雑文性をもっていることをみたが、後期の五篇になるとその雑文性はますます鮮明となる。また、前期三篇のうち女媧に積極的で正面の人物を描いた魯迅は、後期のものでは非攻にそれをもとめている。それで、ひじょうに雑文性のつよい後期の作品である非攻をみてゆく前に、まず墨子の時代環境をあらかじめ概観しておく必要がある。

春秋以後であり戦国の初期といわれている墨子の時代は、大国、強国が小国、弱国を侵略し併呑するという戦乱の絶え間ない世の中であつた。この時代に墨子は兼愛、非攻の思想のもとに反侵略戦争論を提唱し、たんに理論においてのみならず実践をもつて侵略戦争に反対したのであつた。墨子がどのような時代、社会背景のもとに彼の反侵略戦争理論をととなえ、いかなる行動をもつて侵略に反対したかを知ることは、非攻を理解するうえに一つの条件となる。それで時代的背景からみてゆくと、楚が宋を攻めようとしたのは、およそ春秋の

後戦国の前とされているので、西暦紀元前四五百年前後である。墨子の魯問篇によると、楚と越は長江で戦つたが楚はしばしば敗戦の憂目をみた、公輸般が魯より楚にゆき楚のために水上作戦の機械をつくつたため楚はようやく越に勝つことができた。公輸般が越を敗り長江淮河以北を占領したその前後が、宋の侵略にとりかゝろうとしていた頃とされている。すなわち、越を破り淮北、泗上等の地を占領したのち、さらに北進して宋に手をのばすため公輸般は攻城の雲梯を發明したのである。この頃、北方には秦、齊、晉の大国があつた。秦は紀元前四六一年に西戎を攻めなおも西方に発展していた。齊では大臣の田常が齊簡公を殺して政権を奪取し戦国時代の緒をつけていた。晉は北方の盟主ということになつてはいたが、韓、趙、魏の三国に分裂していた。この情勢のもとで、中原に向つて行動の起せるものは南方の強国楚のみであつた。墨子はその反侵略論を貫くためには、さしあたつて平和を脅かす最大最強の勢力である楚が第一に問題とならねばならなかつた。こうして墨子は楚の宋侵略を阻止すべく自から楚まで赴いたのである。

楚の国へいつた墨子は侵略者といかに理論闘争を行い彼らを説得することができたか。

魯迅は墨子の公輸篇に取材してほとんどそのまま次のように書いている。

「北方である人が私を侮辱しました。」墨子は静かな調子で言つた。「あなたにお願いして、殺してもらおうと思つて……」

公輸般は不快そうな顔をした。

「十円さしあげます。」と墨子はなおもつづけて言つた。

その一句が、主人に怒りを抑えがたくさせた。彼は面を伏せて、冷やかに答えた。

「私は義において人を殺すに忍びません。」

「それは結構だ。」墨子はすつかり感動して、いきなり立ちあがると、敬礼を二度もくり返してから、なおも静かな口調で言つた。

「ところで、少々お話し申上げることがあります。私は北方において、あなたが雲梯をこしらえて宋を攻めるといふ噂をききました。宋にはどんな罪科

がありますか。楚国に余っているものは土地であります。足りないものは人民であります。足りないものを殺して余っているものを奪うのは、智とは申せません。宋に罪がないのにこれを攻めるのは、仁とは申せません。その君の過を知つていてこれを諫めぬのは、忠とは申せません。諫めてしかも成らぬのは、強とは申せません。義において少きを殺すに忍びずして、しかも多きを殺そうとするのは、類推の理を知るとは申せません。高見、いかがでありましょう……」

「それは……」公輸般は考えた。「まことに、おつしやる通りです。」

「それでは、止めることはできませんか。」

「それはできないのです。」公輸般は悵然として言つた。「すでに王に説いてしまつたのです。」

「では、私を王に会わせてくださればよろしい。」……

「こゝにひとりの方がおります。馬車を持つているのに、隣家のぼろ車を盗もうとします。錦繡があるのに、隣家の短褐を盗もうとします。米や肉があるのに、隣家の糠の飯を盗もうとします。これはいかなる人でありましょうか。」

「それはかならず盗癖のある人にちがいない。」と楚王は率直に言つた。

「楚の地は」と墨子は言つた。「方五千里あります。宋は方五百里しかありません。これは馬車とぼろ車のようなものではありませんか。楚には、雲夢の沢に犀や鹿が満ち、江漢の川には魚や貝が、他に比類ないほど多く取れます。ところが宋は、いわゆる兎一匹、鮒一匹いない、というところがあります。これは米や肉と、糠の飯のちがいのようものではありませんか。それゆえ、臣から見ますれば、王の吏属が宋を攻められますのは、これと同類であります。」

「まことに、そのとおりだ。」楚王はうなずいて言つた。

「じやが、公輸般は、わしのために雲梯を造つてくれておる。攻めんわけにはいかんのだ。」

「しかし成敗は、どちらとも申せないのであります。」と墨子は言つた。

「木片がありましたら、こゝで試みましてもよろしゅうございます。」

楚王は新奇を好む王であつたから、非常に喜んで、ただちに侍臣に命じて木片を取り寄せた。墨子は、自分の革帯を解き、それを弧形に曲げ、公輸般に面して、それを城に見立てた。数十片の木片を二組に分け、一組を手もとに残し、一組を公輸般にあたえ、攻守の器具とした。

かくて、彼らふたりは、おのおの木片を手に取り、将棋のごとくに、戦争をはじめた。攻め手の木片が進めば、守り手の木片は支え、こちら側が退けば、向う側は狙いをつける。ただ楚王と侍臣とには、見ても何のことか少しも解せなかつた。

このように一進一退すること、合計九回に及んだ。攻守おのおの九通りの手段をつくしたと思われた。それが終ると、公輸般は手を休めた。墨子はそこで、革帯の弧形を自分の方へ向けかえた。こんどは彼が攻める番らしい。同じように一進一退してもみあつていたが、三回目に及んで、墨子の木片はついに革帯の弧形の内側へ侵入した。

楚王と侍臣とは、意味はわからぬながら、公輸般の方が先きに木片を放り出して、顔に浮かぬ色をうかべたのを見て、彼が攻守ともにまつたく失敗したことを知つた。

楚王もやや不興をおぼえた。

「私は、どうすればあなたに勝つかを知っている。」しばらくしてから、公輸般は照れくさそうに言つた。「だが私はいわぬ。」

「私もどうすればあなたが私に勝つかを知っている。」と墨子は冷静な口調で言つた。「だが私は言わぬ。」

「おまえたちは、何のことを言つているのだ。」楚王はいぶかしそうに尋ねた。

「公輸般の考えは」と墨子は、向き直つて答えた。「私を殺そうというだけのことであります。私を殺せば、宋には守り手がなくなるから、攻められると考えているのであります。しかし、私の学生の禽滑釐ら三百人のものは、すでに私の防禦の機械をたずさえて、宋城において楚国より来る敵を待ちうけて

おります。たとい私を殺しましても、攻め降すことはできないのであります。」

「まことに妙計だ。」楚王は感に堪えて言つた。「さらばわしも宋を攻めることは思い止まろう。」(現代中国文学全集魯迅篇)

これが有名な、墨子説得の一段である。だいぶ長くなつたが、墨子の人物、思想、理論、説得の方法がよくあらわれているし、また雪葦の議論を検討するうえにも必要だから、公輸篇と対照していただきたい。

ところで、強大な侵略勢力をたんに口説の理論をもつて説得しえられるものか。いや、いかに理論において侵略戦争の不義を論じてみたところで、侵略勢力はすなおに引き退がるものではない。彼らの頼むものは力であつて、真理でもなければ正義でもない、墨子にそういうことは見透しであつただろう。したがつて、強大な侵略勢力とたゝかうためには、反侵略の防禦力をたくわえておかねばならぬ。理論において侵略戦争の不義を攻撃するとともに、実力をもつて侵攻してきた敵の新鋭兵器に対抗せねばならぬ。これはいかなる人といえども個人の力をこえるものである、だから墨子は弟子三百人と共に固い団結のもとに反侵略戦争の集団を結成したのである。こうして理論上のみならず実践において侵略戦争を防ぐことに成功したのである。

孔子思想のアンチテーゼとしてあらわれた墨子思想は、その発生と同時に庶民的であり革命的であつた。李長之は墨子学派の特徴として、第一に解放された工芸奴隷から生れた集団であり、第二に組織ある貧しい浪人者の集団であり、第三に実践的な戦争反対の集団であつて、これらが他の先秦諸子の諸学派と区別される特異点としているが、これらは墨子の人民性、革命性からでてくることである。また孔子思想の中心が仁であるのに対し、墨子のそれは義であつた。非攻のうちで魯迅は次のような墨子と公輸般の会話をはさんでいる。

「心身を勞して急患を救うということは、賤しい人々のものであつて、上つ方には必要はありません。彼は君主ではありませんか、わが同郷よ。」

「そうは言えんでしよう。絹や麻や米麦は賤しい人々の作り出したものですが、上つ方も必要ではありませんか。まして義を行うことにおいておやです。」

「あなたにおあいしない前、私は宋を取ろうと思つていました。おあいしてからは、たとい宋国をただくれてやると言われても、もし不義ならば、まづびらお断り……」

「もしあなたが、あくまで義を行われるなら、私は天下をも差しあげるでしょう。」

義を中心とした墨子思想について、雪葦が古籍によるものとして出典をあげているものに次の個所がある。

「私の船には鉤拒があります。あなたの義にも鉤拒がありますか。」と彼は尋ねた。

「私の義の鉤拒は、あなたの舟戦の鉤拒よりも秀れています。」と墨子は、はつきり答えた。「私は愛をもつて鉤し、恭をもつて拒します。愛をもつて鉤しなければ、親しみあわず、恭をもつて拒しなければ、信じあいませぬ。親しみあわず、信じあわなければ、たちまち離散します。それゆえ、互いに愛し互いに恭することは、すなわち互いに利することでありませぬ。いま、あなたが鉤をもつて人を鉤するならば、人もまた鉤をもつてあなたを鉤するでしょう。あなたが拒をもつて人を拒するならば、人もまた拒をもつてあなたを拒するでしょう。互いに鉤し互いに拒することは、すなわち互いに害することでありませぬ。それゆえ、この私の義の鉤拒は、あなたの舟戦の鉤拒よりも秀れております。……」

そう言うと、彼は跳びあがつて、後房の方へ駈けてゆき、箱でもひつくりかえしている風であつた。まもなく、再びあらわれたときは、木と竹でできた一羽の鷺を手にしていた。それを墨子に渡しながらか、言うのであつた。

「一度飛ばすと、三日も飛んでいますよ。やや巧妙と言えるものではないでしょうか。」

「しかし、大工が車輪を作るのには及びませぬ。」墨子は、ちらつと見ただけで、敷物の上に置いていつた。「大工は三寸の木を削つただけで、五十石の重さのものを載せることができます。人を利するものが、すなわち巧妙であ

り秀れたものであります。人を利さぬものが、すなわち粗雑であり悪しきものであります。」

「いや忘れていました。」公輸般は、またもやりこめられて、はじめて気がついた。「それがあなたの御意見であることをついうっかりしてました。」

「それゆえ、あなたがあくまで義を行われるならば」と墨子は彼の目を見つめながら、鄭重な口調で言つた。

「たんに巧妙というだけではありません。天下さえも、あなたのものになります。……」

以上だいぶ長く非攻から引いてきたが、これによつて墨子の中心思想やその論理の展開方法、説得の技巧、人物をほゞ全体的に知ることができる。義を中心とした兼愛、非攻の思想、下層労働人民の立場にたつた人道精神、実践的
反侵略思想、宿命論に反対する非命思想はいかなく表現されていよう。なお、儒教への批判攻撃もこの一篇にみられる。公孫高が「先生は非戦を主張なさるのですか。」と問うたのに対し、墨子が肯定すると、「では、君子は戦わないのですか。」と問いかけ、なお墨子が肯定すると、「豚や犬でも闘います。まして人間は……」と公孫高がいう、これに墨子は答える、「やれやれ、おまえたち儒者は、口では堯舜をたゝえながら、行いは豚や犬を学びたいのか。気の毒千万だ。」

これにより、われわれは非攻のうちに墨子の積極的で進歩的な革命思想の諸要素を発見できる。それらは1934年代において積極的進歩的革命的であつたとゝもに、現在なお民族の科学的文化遺産として残るものである。だが、これらの貴重な成分とゝもに、墨子思想のうちには相矛盾し或いは反動的な成分も含まれている。ところで、魯迅がそれらの消極面には一切ふれないで、たゞ積極的進歩的のみをたゝえているのは、科学的論文ではなく、文学という芸術形式のためであり、それも長篇という形式をとらず短篇のうちに正面の人物を突出的に描いているからである。こゝで魯迅は歴史をえがいている、たんに

歴史的故事を現代的に再現しているのではなく、新しい時代のもとに、階級闘争と民族闘争が激化している第二次国内革命戦争時代のもとに再現している。しかし、歴史をえがいているということは、雪葦が歴史作品としての観点を第一義とし、その現実的な思想闘争、政治闘争を第二義とし、いやかえつてみようとしなぬとは異なる。雪葦の観点からすると、当時の具体的な歴史時代における魯迅の思想闘争を見逃がし、せいぜい附随的にしかみていないため、伊凡の指摘しているように、最後に出てくる「救国義捐金募集隊」ということばで非攻が歴史を描いたものとしてみられぬ示唆のあることにはふれていない。墨子が宋の国に見た歴年の水害と戦禍のあとや、救国を叫ぶ学生の声を書いた部分なども歴史の描写であると、もに、「救国義捐金募集隊」同様に現実を書いたものと見られはしないか。これらは当時の社会情勢をそのまま反映している。以上にみてきたところにより、非攻が歴史を描いたということは認められていゝ、がそれと同時にまた現実も描かれているということも無視してはならない。すなわち、歴史と現実の二重性をもっている。一方において雪葦は歴史的な面のみをみているし、他方伊凡は現実のみをみている。私はこの両者を統一する立場にある。いつたい、魯迅の筆法はこうしたものである。歴史と現実、外国と中国をつねに統一している、これは極度に言論の抑圧されていた当時の中国において編みだした魯迅独自のものである。したがって、雪葦は素材や外観、形態にとらわれて本質をみていないし、伊凡も雪葦の誤りを衝くに急なあまり一面的になつている。伊凡は非攻について次のように述べている。

事実上、故事新編の八篇のうち「歴史作品」に近いのは一篇しかない、それは眉間尺の伝説を総合して書いた、執念ぶかい復讐を熱烈に讃えた鑄創である。その他のものは、非攻にしても作者が「単一の記載材料どおりに」、「伝説中の原始的社会主義革命家の相貌を浮きぼりにしている」とはいえ、単に「故事」をくりかえしているのではない。そのなかには現実への直接攻撃が巧みにはさまれている（こういう事に託して自己の思想を発表する方法は、国民党のむごい支配下にあつて多くの作家がとつたところである）。作品の最後で「救国義捐金募集隊」ということばまで入れているのは、読者がこの作品を完

全に「歴史を描いた」ものと見做さないための示唆である。

伊凡のことばは基本的には正しい、私はさきに歴史と現実を統一してみるといつたが、このことはもちろん、両者を折衷することを意味しない、それは魯迅が文学者、政治家、歴史家等々であるからといつて、平等に折衷してしまうことが誤りであるのと同じである。私が伊凡のことばに賛成であるというのは、前にも述べたように魯迅の歴史論からみても文学の政治性からみても、たんに歴史的故事を再叙述するにとゞまるようなことをするはずがないからだ。非攻においても、魯迅の根本的なねらいは、その政治性にあり雑文性にある。伊凡によると故事新編は「故事」という形式をかりた雑文であり、これらの作品が読者に自然で完成されたものとして感ぜしめるのは、作者が「古人」をえがこうなどとは全く思わず、たんに事にかこつけ現実に攻撃を加えたからであるといっている。だが魯迅は、まるきり「古人」を描こうなどとは思わなかつたのだろうか。これには些か疑問がある。伊凡がこれまでに極言せねばならないのは、雪葦とのいろいろな関係によるようだ。雪葦によると、魯迅の目的は歴史を書くにあつたのではなく、たゞ歴史をかりて公然と革命思想を宣伝できなかつた時代にこれを利用して戦つたとは考えられないというのである。その理由として魯迅はそういう時代に無数の雑文という利刃をもつて戦つたからであり、十三年間にたつた八篇しか書いていない故事新編は対敵闘争の武器ではないというにある。当時の魯迅が暗黒勢力との闘いにおいて精鋭かつ最も有効適確な武器として雑文をふるつていたことはいうまでもないし、またこれが主要な戦闘形式であつた。しかし革命作家としての魯迅はディアレークチックである、具体的環境のもとにおいて必ずしも一定の戦略戦術をまもらなければならなかつたわけではない。彼の闘争の武器もまたそれ相応に各種の形式をとりえたのである。したがつて、伊凡が一つの武器を常用していても、時に他の武器を用いることを妨げない、と批判しているのは正しい。事実上、魯迅は雑文を主要武器としたほかに、翻訳や木刻にも異常な精力をそゞぎ、人民の敵に打撃をあたえ、革命勢力をまもり育て、暗黒のうちにあつて、常に新しき勢力に希望と光明をあたえてきたのである。だから文学においても雑文のみを闘争の武

器とみなす雪葦の見解はあきらかに誤りである。このように雪葦の誤りを批判し、魯迅の、人民の敵革命の敵との闘争を正当に解している。そして雪葦の歪曲に対し次のように批判している。

「革命作家として当面の革命の要求により、歴史作品或いは神話、伝説の作品を書くことは同様に積極的意義がある。しかし、本来現実批判である作品をそうでないということは、重大にも作品を歪曲し、作者の戦闘精神を歪曲するものである。」たゞ私に納得のゆかないのは、伊凡が歴史作品の積極的意義を認めながら、なぜそれを当面の革命の要求と現実批判から切りはなしてしまうかということである。本来が現実批判の作品であつて同時に歴史作品であつてはどうしていけないのか。私が本来は現実批判の作品でありながら他面において一定の意図のもとに書かれた歴史作品であるとなす、主観的客観的根拠は次のとおりである。前回において魯迅の歴史観を概観したが (p.75—p.76)、これにより従来のがめられ真実をうしなつていっている歴史から「民族の魂を反映し将来を預見しているもの」をほりだし、これを讃えさらに発展せしめようとしていたこのことから、書きなおされた歴史の出現を熱望していたことは断言できる。じじつわれわれは雑文のうちにその証明を見出すことができるのである。

「わたくしはながい間、現行の歴史教科書を見ないから何が書いてあるか知らない。だが新聞雑誌には成吉思汗を自慢としている文章を見かけることがある。もはやとうの昔のことだから関係なしといえないこともないが、ひよつとすると関係するところ大かもしれない。それに何といても真実を語るにこしたことはないのだから。それゆえ、文学を学ぶにしろ、科学を学ぶにしろ、まず歴史に関する簡明で確かな本を読むべきだと思う。しかし、天王星や海王星、かえるの神経細胞などばかりの話や、または梅を詠い背の君と呼ぶだけで社会の議論がないぐらいならば、もちろん読むことはない。」

こゝには社会に関する議論である社会批判の思想闘争の重要性が強調されているし、雪葦の議論への反証があると同時に、書きなおされた簡明で頼りになる歴史書の必要性がとかれている。笑うべきか泣くべきか途方にくれるよう

な阿Q精神の支配的な当時の中国において、魯迅は真の中国歴史、真の民族精神、真の気骨ある伝統的人間像を要望し、かつ描きたかつたのにちがいない。じじつ、魯迅は「中国人は自信をうしなつたか」という雑文で、「こういう人びとはげんざいでも決して少くはないのだ。彼らは確信をもち自ら欺くことをしない。かれらは屍をふみこえて闘っている、たゞつねにふみにじられ、抹殺され、暗闇のなかに消えさり、人びとに知られないだけである。中国人が自信をうしなつたとは、一部の人々には通用する、だが全体となるとそれは全く人をしいるものである。」このばあい魯迅は反動的国民党の残酷な血の弾圧のもとに戦っていたコミュニストについていつているのであるが、この憤りは反面において人民、民族、革命のため身命をなげだしている英雄的人物にかぎりない讚美をささげ、こういう先進的積極的人間像の典型創造ははげしく彼をとらえていたにちがいない。だが悲しいことに、魯迅は左翼作家連盟の最高指導者であり、政治闘争、思想闘争の中心地上海にあつたとはいえ、外部との交渉はほとんどたちきられわずかに瞿秋白、馮雪峯らとの接触を保つているだけにすぎなかつた。こうして広汎な大衆との連繫をたゝれ、また民主民族革命戦争の中心領導者である中国共産党の闘争のなかにもいながつた。したがつて魯迅が新らしい先進的人物の像を描くことが不可能であつた以上、歴史上の人物を借りて表現するよりほかなかつたわけだ。

したがつて、非攻には真の歴史、積極的進歩的要素をもつている歴史的事実を改めてとりだしてそれを闡明しようという意欲があると同時に、なおそれらを借りて現実をも描こうという二面性をもつていると解される。

非攻はこれぐらにして理水はどうか。理水は非攻よりもはるかに雑文的性質がいちじるしい。雑文的性質が著しいというだけでなく、非攻のもつような二面性、二重性はまず感ぜられない、これはまつたく古籍故事をかりた雑文であるという伊凡の説のとおりである。こゝには当面の中国社会の荒廢と窮乏、英米帝国主義にあやつられている官僚、学者文人への諷刺と攻撃がある。またそれと対照されている愚民とよばれる人民がある、また一身をなげだして人民につくす偉大な人間禹に対する讚美がある。これらを見逃がして理水を論ずることは、

徒らに議論をからまわりさせるだけにすぎない。たとえば、雪葦は以上の重要な諸点を見落して、たゞ理水の第一節で「禹」の存在の有無の論争から「法律的な解決」、さらに「やむをえず考証学を人々にゆずつて自分は民間の曲を搜集にいつた」までは「古史弁」を書いた顧頡剛（潘光旦らとも関係する）に関係するといつて、古史弁と三間集の顧頡剛に関する文章を引用しているだけにすぎない。これはあきらかに焦点をはなれている。また例によつて雪葦は、理水の典拠として史記、列子、莊子、尚書、左伝、呉越春秋、玄申記、古嶽流経、周易、淮南子等の記載を綜合したものとして、それぞれ原典から引用している。こういう考証的工作も研究上たいせつな一部分にはちがいないが、この材料を駆使するのではなく、材料にのみ停滞し材料にほんろうされ本質の研究に進んでいない。非攻では暗示的なことばとして「救国義捐金募集隊」のようなものはほかに出てこないが、理水になるとそれがひんぱんにあらわれる。大学、幼稚園、グッドモーニング、ハウドゥユードゥ、O.K.、シエイクスピヤ等々で、明白に現実を暗示している。理水は内容からいつても形式からみても、非攻に近いというよりはむしろ雑文といつた方が適切である。且介亭雑文の「深夜にしろす」と照しあわせてみればこの点は明瞭であつて、「或る童話」などはまったく理水と同類型に属することがわかるだろう。理水との比較上ちと引用してみよう。

ある時代にこんな国がありました。権力者は人民を抑えつけましたが、かれらはいずれも強敵に思われました。音標文字はまるで機関銃のようで、木刻画はまるでタンク（特車のこと）のようでした。土地は取得したものの、予定の駅で下車することもできませんでした。

地上は歩くことができず、空中を飛びまわらなければなりません。そのうえ皮膚の抵抗力も弱つてきて、なにか緊要なことがあるとすぐ風邪を引き、同時に大臣たちにも伝染して、一斉に病気になりました。

大冊の字典が出版されていて、それも一部に止りませんでした。しかしみんな実用には向きませんでした。もし本当の様子をはつきりさせれば、かならずこれまで印刷されたことのない字典をしらべなければなりません。

た。そのなかには、大へんハイカラな説明があります。たとえば、「解放」とは「銃殺」、「トルストイ主義」とは「逃走」のこと、「官」の字の下の注には「大官の親戚、友人および召使」とあり、「城」の字の下の注には「学生の出入を防ぐために造られた高くて堅固な煉瓦の壁」、「道徳」の注には「女が腕を露出することを禁ず」、「革命」の下の注には「大水を田地に放ち、飛行機に爆弾をつんで、『匪賊』の頭上へ落すこと」とあります。

大部の法律も出版されていましたが、これは学者を各国へ派遣して現行法を調査し、その精華をとつて編纂して作つたものでした。ですから、この法律ぐらい完全で、また精密なものは、どこの国にも見当りませんでした。たゞ、巻頭に一頁白紙がありました。印刷されたことのない字引を見たものだけが、文字を見つけ出すことができました。はじめに合計三カ条あります。一、寛大に処分してよろしい。三、時には全然これを適用しなくてもよろしい。

もちろん、裁判所もありましたが、白紙から文字を見つけ出した犯人は、開庭の際、決して抗弁しませんでした。というのは、悪人だけが抗弁したがるもので、抗弁しようものなら、どうしても「嚴重に処分」されるからです。もちろん、高級裁判所もありました。しかし、白紙から文字を見つけ出した者は、決して控訴しませんでした。というのは、悪人だけが控訴したがるもので、控訴すると、たちまち「嚴重な処分」をまぬがれなかつたからです。

(青木文庫魯迅選集第5巻 p. 170)

これは当時の中国社会を最も端的、最も如実にかつ最も辛辣に、浮ぼりさせてみせてくれる魯迅雑文中の傑作の一つである。

理水は古籍故事に託して、一応歴史を描くかのような体裁をよそおいつゝ、じつは現実の暗黒面、反動面に手きびしい批判の匕首をなげつけているのである。外面的にいかなる形式、体裁をとつていようとも、本質において雑文であることを事実についてみよう。

それは「湯々たる洪水、方に書をなし、浩々として山を懐み、陵に襄る(書経)時代であつた。(竹内好訳 続魯迅作品集 p.275)とまず古典を引いて現代を概括し、さらに

災害が長くつづいているため、大学はとうの昔に解散していたし、幼稚園さえ開いているところはなかつた。そのため人民たちは、すこぶる無智蒙昧であつた。文化山には、多くの学者が集つていた。彼らの食糧は、奇肱国（古代の伝説にある飛車を作つた国）から飛車で運んで来るので、欠乏のうれえはなく、安んじて学問研究ができたのである。しかし、彼らの間では、大多数が再び反対し、なかには世に再なるものが実在することを信じないものすらあつた。

毎月一回、恒例によつて空中にヒューヒュー音がする。音はだんだん大きくなる。と飛車の姿が見えてくるのである。車には旗が立つていて、旗には黄色い丸が描かれ、かすかに光つている。地上五尺の高さまで来ると、籠をいくつも吊り下げる。中に何がはいつているのか、ほかの人々にはわからない。たゞ上と下で対話するのがきこえるだけである。

「ゲー・モーニング！」

「ハウ・ドゥ・ユー・ドゥ！」

「カルチュア……」

「O.K」(同上)

伊凡は上の例をあげて雪草を反駁しまだ原作に接していない読者といえども、この一段だけで当時のみにくい現実へのいかにはげしい攻撃であるかを見出すに困難でない。読者のまえにあらわにされているものは、まさに国民党支配時代の官場学者の恥知らずな様相であり、英米買弁集団を主体とした国民党の卑劣な様相であるといつている。たしかに、こゝには人民の災難、饑餓、窮乏をよそに、自己は豪奢のうちに太平楽をきめこんでいる支配階級の姿がある、と同時に彼らの主人である英米帝国主義のあまつた食糧やふる軍艦、はてはギャング映画まで搬んできて愚民教育をし戦争をさせているさままでみえる。こうしたことは、当時の具体的環境のもとにあつて、人はそれと察知できたのである。二心集に収められている「現代映画と有産階級」を参照して読めば、以上のことが想像でもなければ臆測でもないことがわかるだろう。

・ 次にかゝげる一段も雑文性を見うる例である。

「視察の結果は？」

大官たちは膝行して進みながら、互に顔を見合せた。宴会の跡もなまなましい席の下手にならんで坐つた。噛りかけた松皮餅や、牛の骨のしやぶりカスが眼につく。……

「さして悪くはございません——印象はきわめて良好でございます。松の皮や水草などの生産は少くなく、飲料はきわめて豊富であります。人民はみなまじめであります。彼らは慣れておるのであります。申し上げます。彼らは困苦に堪える点におきまして、世界にその名を馳せたる者どもにございます。……

「そして一方、奇肱国へ使者をつかわし、われわれがいかに文化を尊重しておるかを知らせまして、救恤品は毎月こちらへ送つてくれればいい、ということをしるるのであります。学者たちからの報告が、こゝに提出されておりますが、じつに堂々たる文章であります。彼らの意見によりますれば、文化は一国の命脈にして、学者は文化の靈魂である。文化にして存在するかぎり、中華は存在するのでありまして、他の一切は、二の次である。……」

「彼らの意見によりますれば、中華の人口は多すぎるのであります。」と最初の大官が言つた。

「多少減らした方が、太平を致すの道でございます。いわんや、それらは単なる愚民でありまして、その喜怒哀楽は、智者の推測するとき精緻なるものではありません。人を知り事を論ずるは、何よりもまず主観によらねばなりません。たとえばシェイクスピアは……」

こゝで注意しなければならないのは、文化ということばである。これは本来のカルチュアの意味ばかりではない、文化は二つの意味をもっている。一つは儒教精神を基調にした(或いは基調にしたと公言されている)国民党支配階級の反共反人民的文化であり、もう一つは象徴的に国民党政権やその支配集団をさしていることだ。それからもう一つ注意に値するのは、愚民である。雑文を読んだものには誰にもあきらかなように、魯迅はこのことばを自分のものとして用いているのではなく、敵のものとして用いている。上にあげた例は支配階級

の支配的思想をよくあらわしているが、愚民についてもそうで、反動的国民党の官僚(?)の口をとおして出ているということによつて、自己が愚民(人民大衆)と共にあることを表明しているのである。また彼らのいわゆる愚も反面的人物のいうそれとは異質のものであることも表明しているのだ。じじつ、理水をよく読めば、これらの愚民は奴隸的性格においてえがかれてはいるが、それでもまた経験によつて事の真偽をわきまえうる能力をもっていること、しかも彼らの愚は天性のものではなく人災の結果であることを、魯迅はつけ加えることを忘れていない。したがつて、理水の愚民も阿Qと同じく否定肯定の二面性のうちにえがかれている。

以上おもだつた二つの例によつて、理水が古籍に依拠しそれを現代的事実により補充したとみなすよりも、むしろその逆さえあることがわかる。理水も非攻と同じく肯定的積極的人物を称揚している点、反儒教精神を表白している点、それにもまして現実の醜悪を焼きつくすような熱火の戦闘的批判と諷刺という点で一致しているが、その諷刺のおもむく方面の多面性と深刻性でははるかに非攻をしのぐものがある。理水も非攻と同じく、歴史と現実の二重性をもつてはいるが、歴史の面はどちらかといえばよわい、むしろ借り物といつてもいゝくらいである。以上のような点から、少くとも理水に関するかぎり、伊凡のように雑文の一体としたい。

采薇は出関、起死とも、後期の故事新編のなかでは、前記二篇と対照的な主題をもっている。非攻と理水が積極的正面の肯定的人物を讃えているのに対し、采薇、出関、起死はいずれも消極的人物を主題にしていることが、まず特徴的である。だが、これらの三篇は魯迅のものとしては力がこもっていない、どちらかといえば、あつてもなくてもよいといつていゝくらいである。たゞ起死だけが特殊な点から魯迅研究上一つの意義をもっているように思われる。どうして後期の故事新編が理水をのぞいて、力作でないのかといえば歴史をえがくにせよ現実を諷刺するにせよ中途半端だつたということによる。魯迅は長篇が書けなかつたのだから真に戦闘的思想性にみちた歴史の敘事詩には手がつけられなかつただろう。それに当時の魯迅は「死せる魂」の翻訳に全精神

をうちこんでいたといつてもいゝぐらいだつた。もちろん、おびたゞしい雑文、そして最もすぐれた雑文もこの時代に書いていたし、木刻の普級啓蒙にも熱心だつた。生涯で最も多忙であり、かつ最も健康状態のわるかつたこの時代に、魯迅の文学的労作は主として雑文および「死せる魂」の翻訳にあつたのである。故事新編などは片手間の仕事だつたといつてもいゝすぎではなからう。ドイツ語訳本を底本とし、ロシヤ語の原文と日本語訳を参照して訳されたという、ゴオゴリの死せる魂は、魯迅にとつて畢生の大翻訳だつた。いかに苦心惨憺して訳したかは人の知るとおりである。旧ロシヤ社会の矛盾、すなわち封建的貴族地主階級と被圧迫農奴の矛盾および封建的農奴制とロシヤ社会発展の矛盾を反映している、「死せる魂」は、たんにロシヤの暗黒社会のみならずあらゆる封建的旧社会の鏡であるという点で、まさに中国社会の映像でもあつた。中国とロシヤは歴史的にみても長期の野蛮と圧迫のうちにあり、経済的文化的におくれた国であるなどから、中国では容易にロシヤのリアリズム文学がうけいれられた。まして「死せる魂」は暗黒社会の鏡としてのみならず、世界リアリズム文学の最高峯の一つとして、いくたの典型の創造、高度の概括性と芸術性において、とうてい当時の中国文学の水準では及びもつかない傑作であることをみれば、魯迅がいかに全精神をうちこんでその翻訳に没頭していたかがわかる。魯迅としては自ら創作の筆をとるよりは、ゴオゴリの翻訳にその社会的意義を見出していたのにちがいない。故事新編が力作でないというのはこういうところからきているのだろう。ところで、まず、采薇からみてゆくと、伯夷、叔斉の周の粟をくわぬというあまねく知られている美談は、それ自身抵抗と闘争を内包してはいるが、衆人の思惑に気兼ねすることなく、強い確信のもとに人民のなかにあつて人民と共に実践窮行する人物とは、あまりにへだたりがありすぎる。魯迅の人生観世界観は彼らの生き方を肯定することができない。魯迅の意図はかゝる消極的人物の否定であり、かゝる美談に対する懷疑といえる、こういう点から魯迅は歴史の真実の暴露という目的のもとに歴史作品をえがいたといえる。だが、このばあいに従来とおなじく、歴史と現実の二重性と統一がみられる。すなわち、歴史上の美談に対し、古籍によつて独自の新らし

い解釈をくだしながら、現実の批判と諷刺をさしはさんでいる。たとえば、「老先生、どうか怖がらないで。上海派の文士どもならてつきり『豚を剥ぐ』と
ころでしょうかね。それがしどもは文明人でありますから、そんなつまらぬ真
似は致しません。」とか「あの二人の野郎どもは詩歌を語る柄じやない、と思
つた。第一、貧乏だ。生活のために暇もないのだから、立派な詩ができるわけ
はないじやないか？ 第二、「作為」がある、詩の「敦厚」を失つている。第
三、議論が多い、詩の「溫柔」を失つている。特に議すべき点は彼らの品格で
あつて、全体的に矛盾している。

二人とも馬鹿野郎だ。養老院に逃げこむのもよかろう。だがそれで超然と
していようとしなかつた。首陽山に逃げこむのも、よかろう。だがまた詩なん
か作ろうとしている。詩を作るのもよかろう。だがまた感慨を洩らそうとし、
己れの分を守つて『芸術』のための『芸術』をやろうとしない。……

彼らのものは、『怨んでいる』ばかりか、それこそ『罵つて』さえいるの
だ。花がなく、刺ばかり、それさえいけないのに、罵るばかりとは以ての外
だ。文学のことは差置いてだとしても、彼らが先祖伝来の家業を捨てたこと
にしたつて、あれじや孝子でも何でもなし。その上こゝへやつて来て朝廷の政
事をそしるとは、いよいよ以つて良民とは申せぬ。」

こゝで諷刺されているのは、伯夷叔斉ではなくて、いつている小丙君自
身であることはいふまでもなし。この例文は且介亭雜文中のあるものと同じ
く、当時の文学者たちへの七首のひらめきである。采薇は伊凡のいうように、
旧套を墨守し時勢の推移にうとい盲目的正統觀念者を諷刺したものである。だ
がこのばあいはその主題をはなれて附随的に現実の批判と諷刺を行つているか
のようだ。この例を全体からきりはなしてみると、小丙君の否定的な人物に対
して伯夷叔斉を肯定的な人物ともまちがいかねる。しかし魯迅はよくこういう方
法を使う、いかなる機会もものがさず、敵に打撃をあたえ、またその機会をつ
くりだすことだ。こうみてくると、魯迅は意識的に二つの目的をもつていたとい
える、それはすなわち、歴史作品として伯夷叔斉を批判し他方では当時の文学
者連へ一矢を放つていることである。したがつて采薇は歴史作品でかつ雜文的

であるが、理水よりは非攻にちかい。

出関と起死は采薇と同類ではあるが、出関は老子、起死は莊子といつたぐあいに、いずれも中国の大思想家をテーマとし、またいずれも傍観的で悲観的、隠遁的な人物をえがいている点で、なお一そう類似性がある。禹や墨子と対蹇的な彼らに対する魯迅の態度は、いうまでもなく否定的である。ヘーゲルによつて古代中国哲学の代表者、東洋古代世界の精神的代表者と目された老子は、素朴な唯物論とゞもに弁証法の萌芽をもち、支配階級の搾取と階級の対立も認めていたが、単に矛盾の対立を認めていたゞけで対立物の闘争をみとめようとはしなかつた。彼の該博な智識と豊富な人生経験を概括した著作も、事実上は支配階級に奉仕するものであつた。階級社会の苛酷な搾取と偽瞞に怒りを感じながら、余計なことはせず聡明な傍観者でありえた哲学者を魯迅は尊敬しない。出関はこういう生き方に対する不満であり反撃である。老子の弱点はまた民族性格の弱点でもあるから、戦闘的啓蒙主義者、社会変革者として、たゞに老子の批判にとゞまらず、民族性の変革という目的も追求している。この思想闘争、啓蒙闘争を考えに入れなくて、たんに歴史作品として老子をえがいているのではない。采薇と同じく、出関も当時の文学者に対する諷刺がある、関所役人と会計先生の会話がそれであるが、これは老子の無為を批判した後、附随的に金にきたない彼らを揶揄しているのだ。この筆法は全く采薇と同じである。そして「新進作家」ということばで現実を暗示していることも他の諸篇と異るところはない。

「あのじいさんは、いつたい、どこへ何をしに行くつもりだろう。」

「流沙へ行くのだと、自分では言つていたが。」

「行けるものか。」外に塩も粉もなければ、水だつて手にはいらぬ。腹がへつてくれば、結局また、こゝへ舞い戻つてくるさ。」

「そうしたら、もう一度本を書かせてやりましょう。」

「たゞし、饅頭がかゝりすぎますね。そのときは、われわれは新進作家を抜擢することに趣旨を変更したから、といつてやりましょう。二つづりの原稿なら、饅頭五ケやれば十分でしょう。」

「そうはいくまい。おこつて、当りちらすだろう。」

「腹がへつていては、当り散らすわけにもいきますまい。」

「それはそうと、こんなものは誰も読み手がいないんじゃないでしょうか。」

「饅頭五ケの元手だつて回収できませんよ。たとえばですね、もしこの説が正しいとするなら、わが長官は、関所役人をおやめになつて、為すなしになつて、そこではじめて為さざるなしで、大したえらい人物になる。……」

「読み手はいるとも。くびになつた関所役人と、まだ関所役人にならぬ隠士とは、ごろごろしている……」

起死は、出関が老子を批判しているように莊子を批判しており、また当時のある悪傾向を批判諷刺攻撃している点でも同じである。たゞ一つ異なるのは、当時の魯迅の自己改造のための鬭争をある程度反映していることだ。魯迅は思想的にも文学的にも、莊子の影響を多分にうけ、晩年にはそれを批判している。莊子からうけたどういう影響を魯迅は批判しているのか。虚無主義である。魯迅は莊子を虚無主義者とみなしていた。ところで莊子が虚無主義者であるかどうかについては中国でも異説がある。げんに郭沫若は必ずしも肯定的ではない、郭沫若は魯迅と同じく莊子の影響をうけている人である、彼は莊子が思想家としても文学者としても傑出しており、中国文化史上特異な地位をしめしていることを強調している。そして莊子は観念論者ではあつたが、決してニヒリストとして断定できないといつている。(郭沫若著、今昔蒲劍、莊子と魯迅)「莊子と魯迅」は1940年に書かれたものだから、いまの郭沫若は何といふかわからない。たゞ現在の中国では莊子が否定される運命にあることは、ほゞ間違いなさそうだ。李長之はその中国文学史略稿第一巻で、「基本的思想について論ずれば、われわれは莊子に対して否定的でなければならない。」といつているが、これは李長之個人の見解としてよりは現段階における中国の普遍の見解とみなしていい、なぜならニヒリストではないにしても、その傾向をもつ莊子が肯定されるはずがないから。このことは、社会主義建設の一環としての思想改造運動がげんざいいかに展開されているかをみれば、おのずからあきら

かである。魯迅の時代は、儒教、道教といった旧思想が支配階級の人民支配のための思想的武器となっていた時代であり、晩年の魯迅は新しい階級にうつゝていつたとはいえ、その非無産階級性と激烈な内的闘争を行っていた。この客観的主観的情勢のもとで魯迅は起死を書いている、この戯画化された莊子はいかなる意図のもとに書かれたか。いうまでもなく、莊子に対する批判であり、老子のばあいと同じく旧思想の反動面消極面に対する批判である。これはそれ自身だけで現実闘争の意義をもっている。だがそれのみにとゞまらない、莊子のカリカチュアはとりもなおさず魯迅のリカチュアでもある。ということは、起死にえがかれている莊子がそのまゝ当時の魯迅の姿であつたという意味ではない。知識分子魯迅の思想改造をはゝむ要因である虚無主義とのたゝかいを莊子のカリカチュアのうちにみているということである。魯迅のことは——莊子の毒にあたつた——もこういう観点からみると、莊子を全面的に否定さるべきものとはみていながつたのではないか。やがて中国に社会主義社会が建設され思想改造運動も現段階と趣きを異にした時代には、必ず「莊子に対して否定的でなければならない」ではなくなるだろう。そのなかに支配階級に奉仕した消極的反動的部分をもっているとはいつても、なお民族の文化遺産として貴い成分を含んでいるからだ。このことは老子についてもいえる。魯迅が全面的に老莊を否定しているのではないことは、出関と起死のうちにさえもうかゞえるのではなからうか。非攻の墨子は讃えられており老莊はけなされているが、前者のばあいその進歩的積極的面が多くえがかれ反動面にはまつたくふれていないのに対し、後者では否定的反面的は部分的であつて全面的ではない。たとえ全面的に魯迅が老莊を否定しているものとしても、それは当時の具体的環境による魯迅の戦術であるとみられる。たとえば、かつて魯迅は中国の書物を読まず外国の書物を読めといったことがある、これは胡適のように中国の文化を全面的に否定し欧米かぶれしていたのではなく、当面の敵への戦術上から出たことは衆知のとおりである。

以上により、起死は莊子の批判であるとともに自己闘争の書でもある、といえる。だがこれまでみてきた諸篇とおなじく、随時随所に当時の悪傾向に対

する諷刺批判攻撃もみられる。この短かい起死のうちに、「自殺が弱者の行為であることを知らないか」、「自殺は弱者の行為だぞ！」と二度も、花辺文学の「秦理齊夫人のことについて」を思わせることばがでてくる。この雑文は、自殺者を弱者と責めながら、それをもたらす経済の圧迫と礼教の束縛という暗黒面には黙して語らぬ勢力を攻撃しているのである。したがって起死もまた歴史作品であると、ともに雑文といえる。

粗雑ながら以上によつて故事新編の八篇を概観した。はじめにかえつて、雪葦と伊凡の故事新編論をみると、現実の利用しうる材料をもつて神話伝説を充実せしめ、古代人の精神と想像を集中し突出せしめるにあるという雪葦の考えは、一面的であるばかりでなく魯迅精神を無視しているものといわないわけにはゆかない。ところで伊凡についても前に述べたように、納得のゆかないところがある。神話伝説の形を借りた雑文というよりは、神話伝説の真実性と虚偽、その進歩的積極面とその反動的消極面の暴露及び宣揚を目的としながら、他面では附帯的に雑文性をもたせたものではないか。いいかえれば、雪葦の骨抜き歴史作品ではない、戦闘性、政治性をもつた歴史作品であると同時に雑文である、ということになる。しかし、これも大ざつばない方で、理水のようにほとんど雑文とみてもいようなものもあり、歴史と現実の統一もあるものはその重点が一方にかたむいている。魯迅個人としても思想的文学的に飛躍の十三年間に書かれた故事新編を概括していうと、こういうきわめて常識的なことになる。魯迅文学中の地位についても、前期の三篇は呐喊と彷徨にちかいし、起死は野草や両地書に通ずるものを持ち、理水は「ある童話」を彷彿せしめる。といつたぐあいに雑多である。とにかく魯迅のもつあらゆる傾向は故事新編のなかにある。だが、これでおしまいかといえ、そうでもなさそうだ。私には故事新編をオーチュルキイとみたらどうかと思われる。オウエーチキンによると、オーチュルキイには二種ある。一つは記録オーチュルキイまたは写實的オーチュルキイとよばれるもので、実際の人物事柄を真実のまゝ人名地名も変えることなしに書くルポルタージュのようなものと、他の一つは、生活中の問題をとくにとりあげ、ある社会現象を概括し、戦闘的に生活の矛盾と衝突

を発見し解決せしめようとするもので、研究的オーチェルキイといれる。これは假名を用いフィクションもありほとんど小説とかわりがない。では小品文とどちらがうかといえ、小品文は大体において短い、オーチェルキイは長い、小品文は一ケの個別問題を書くが、オーチェルキイは一人物についても各方面から描写し筋の発展もある。小品文は一般に文章性をもつていてどちらかといえ論文にちかいが、オーチェルキイは小説の体裁をそなえている。(文芸報1955年第7.8期参照)

これはオウエーチキンのいう小品文とオーチェルキイのちがいである。私はまだオーチェルキイをよく研究していないのでわからないが、それでも故事新編は伊凡のいう雑文とみなすよりオーチェルキイに入れたらどうかと思われる。ツルゲーネフの獵人日記などもオーチェルキイに入るほど広汎なものを含むものであれば、故事新編もオーチェルキイといつてさしつかえないだろう。もし、オーチェルキイと認めることができるなら、故事新編に対するこれまでの評価は変つてくるであろうし、魯迅文学も小説・雑文という二大潮流にのみ目をとどめることはできなくなり、オーチェルキイという形式を附加しなければならぬ。

あとがき、本稿は去年書いた故事新編論(一)のつづきであるが、この一年間に中国では胡風反革命分子の問題がおき、雪葦もその一人であることがわかつた。それで私はつづきを書く興味が殆どなくしてしまつた。ところが、ある日本の大新聞で、「魯迅もいま生きていれば胡風と同じ運命を辿つただろう」、という魯迅も胡風も知つているある学者の説を拝読した。中国において魯迅の歪曲が行われているのと同時に、日本でもやはり行われており、これからも行われる可能性のあることを私は知つた。何らの新味もない本稿をまたも書く気になつたのは、こうした事情からである。

なお社会主義リアリズムの問題もあるし、雪葦のあげている古籍故事の原文を参考にかゝげるはずでもあつたが、紙数の都合で省くことにした。

(1955.11.14)